

鎌倉街道の調査・研究

21期 国際・文化学部A班



リーダー	松本 善弘	サブリーダー	清水 茂
会計	長島 悦子	書記	吉原 泰子
	新井 美代		芝 文子
	伊達 穂積		西川 恵子
	西村 晃		野嶋 哲夫
	山本 美津子	敬称略・順不動	

目次

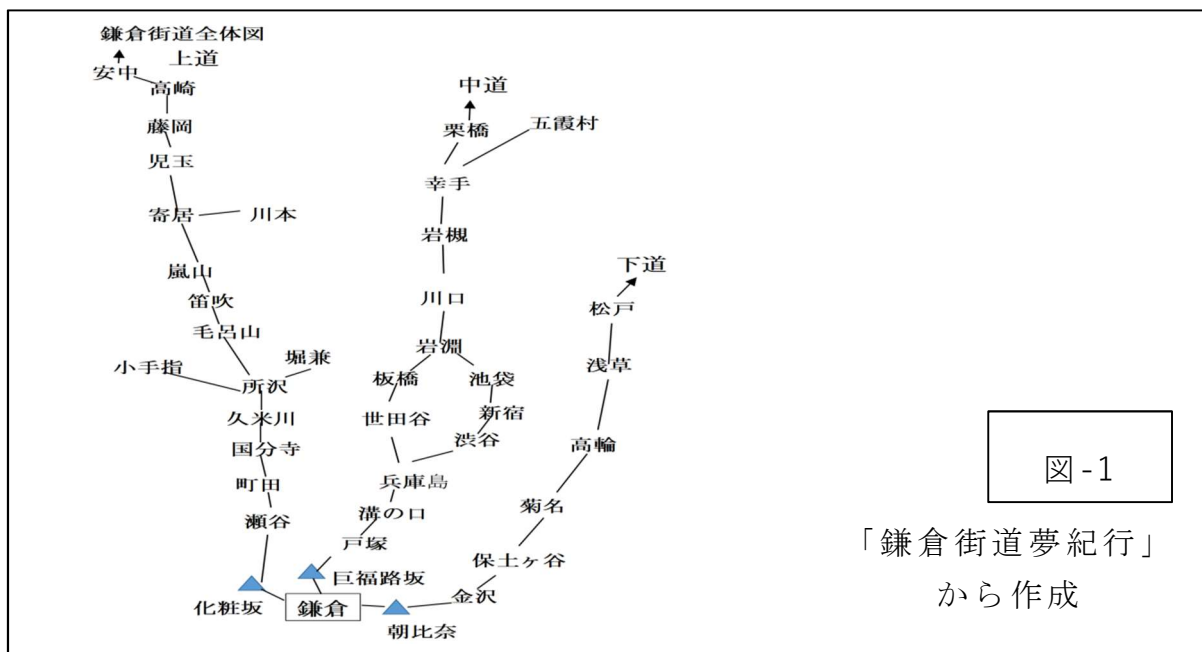
1. 取り上げた理由
2. 鎌倉街道とは
3. 日蓮聖人佐渡流罪の足跡
4. 比企地区に残る源氏ゆかりの地を訪ねて
5. 鎌倉街道と鎌倉幕府の始まりと終焉
6. 佐渡流刑地の解説と流刑者の説明
7. 活動記録
8. あとがき
9. 参考文献

1. 取り上げた理由

2022年NHK大河ドラマで「鎌倉殿の13人」が放映されました。又同年11月に毛呂山町歴史民族資料館付近が鎌倉街道上道遺跡、古墳群、宿跡などが国指定遺跡に登録されました。鎌倉に旅行に行った時日蓮聖人辻説法跡地が残っており、鎌倉街道上道を通って佐渡に流罪された事が分かりました。東松山市周辺に源氏ゆかりの地が多く残っており、鎌倉時代地元の比企能員や畠山重忠など北関東の有力御家人達も鎌倉に異変が生じた時に「いざ鎌倉」と駆けつけた道でもあり、鎌倉幕府を滅ぼそうと新田義貞の軍勢が鎌倉へ攻め上った時も鎌倉街道上道を通りました。鎌倉街道沿いも開発が進んでいて街道も1本の道として残っておらず寸断されています。しかし街道沿いには、名所・旧跡が多く残っており調査・研究したいテーマとして取り上げました。

2. 鎌倉街道とは

鎌倉街道は源頼朝が鎌倉幕府を作った1185年（諸説あり頼朝が征夷大將軍に任命された1192年説もある）頃鎌倉への往復に地元に土着している地頭、武士が通った街道として整備された道であり今から800年以上前に出来ました。当時は鎌倉街道という名称は無く江戸時代に日本橋を起点とする五街道（東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道）が整備され以前からあった街道を鎌倉街道と呼んで区別しました。鎌倉街道は上道（かみつみち）中道（なかつみち）下道（しもつみち）があり（図-1）支道、枝道も多くあり明確ではありません。



2) 鎌倉街道上道の構造と役割

街道は極力真直ぐで平坦になるよう工夫されています。平地から台地に登る時台地を削り、勾配を緩くして平坦になるようにして人馬の移動をスムーズにしています。道の両側には側溝を設け降雨した時の水はけも良くしています。

削って出た残土を両側に積み風除けや雨除けにしています。(図-3、写真-1、写真-2) この様な構造を「掘割り」と呼び道幅は4から6mくらい有ったとされています。鎌倉街道上道は平地と台地の境目を通っているのです、掘割り遺構が各地に沢山残っています。

街道の維持管理は土地の武家が行いました。鎌倉幕府は、戦や緊急時に駆けつけた順番や引き連れて来た家来の数で忠誠心を計る傾向があり、恩賞にも少なからず影響しました。おのずと街道の整備にも力が入っただろうと思われます。

平時には物資の輸送、僧侶や旅人の行き来にも活用されました。

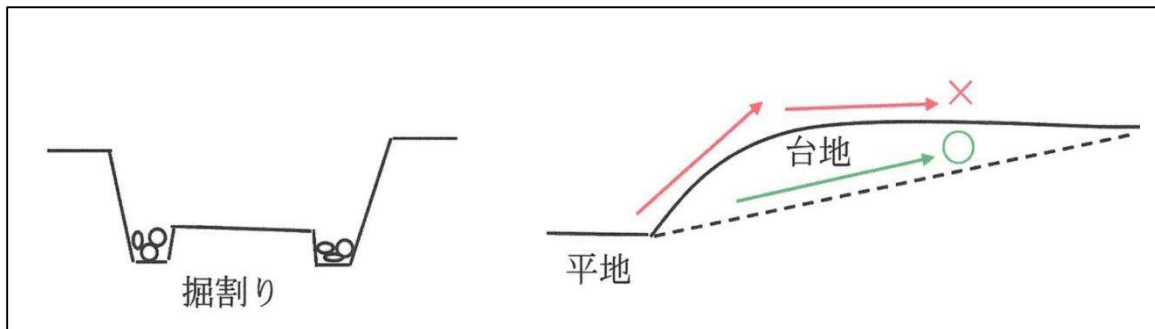


図-3

「40代からの街道歩き鎌倉街道編」を基に作成



写真-1

鎌倉街道掘割り遺構

毛呂山歴史民族資料館付近で撮影



写真-2

発掘調査で現れた鎌倉街道側溝遺構

毛呂山歴史民族資料館の許可で撮影

3. 日蓮聖人佐渡流罪の足跡

1) 日蓮聖人の生涯は下表のとおりです。 (月日表記は旧暦)

年 号	内 容
1222 年	安房小湊（現在の千葉県鴨川市小湊町）に漁師の子として生まれる。
1223 年	12 歳の時、生家から十数キロ離れた天台宗最澄寺に預けられ修業を始める。
1238 年	出家し「是聖房蓮長」の名を与えられる。
1245 年	比叡山延暦寺に遊学する。
1253 年	園城寺（おんじょうじ）、高野山、天王寺等へ遊学し、32 歳の時最澄寺に戻る。
〃	帰山報告を兼ねた説法会を開くこととなり、朝の日の出に向かい「何妙法蓮華経」と 10 回唱えて、名を日蓮と改める。
〃	鎌倉の名越の松葉ヶ谷（まつばがやつ）に草庵を構えて布教活動を開始する。法然（浄土宗）や念仏教など他教を否定。
1257 年	鎌倉に大地震が起きる（正嘉地震）、飢餓、大風、疫病などの災害が相次ぎ、大きな社会不安をもたらす。
1260 年	間違った宗教を信じる事で世の中が乱れているとして「立正安国論」を著わし、北条時頼に提言する。
1271 年	9 月 12 日松葉ヶ谷（まつばがやつ）の草庵で兵に捕らえられる。龍の口の刑場で首をはねられようとした時、江の島の方向から光るものが現れ処刑できなかった。
〃	10 月 17 日相模・依知の本間六左衛門の屋敷から佐渡へ流罪
〃	11 月 1 日佐渡の三味堂に着くが荒れ果てたお堂で冬場を迎え厳しい日々を過ごす。
〃	三味堂で修行するが、佐渡の他宗派の僧侶から多くの迫害や暴言を苦慮した本間六左衛門が日蓮との問答を進め、その結果多くの僧侶も日蓮の実力を認め、以後迫害がなく三味堂より良い場所に移る。
1274 年	鎌倉幕府内で蒙古襲来の危機感が大きくなり、襲来を予知した日蓮を鎌倉へ戻すことにした。2 月赦免され、3 月 13 日佐渡を出発し 3 月 26 日鎌倉に到着する。
〃	5 月 7 日に身延に入る。
〃	10 月蒙古襲来（文永の役）予言してから 5 か月後にあたる。
1281 年	蒙古軍再襲来（弘安の役）
1282 年	9 月 8 日常陸国へ湯治両親の墓参りのため身延を下山する。
〃	9 月 18 日池上宗仲邸（現在の大本山池上本門寺）到着。
〃	10 月 13 日池上宗仲邸にて入滅。享年 61（満 60 歳）
〃	10 月 25 日日蓮聖人の遺骨が身延山に送られる。

1271年から1274年の3年間、日蓮聖人は佐渡に流罪になります。

この時鎌倉街道上道を通って送られて赦免され、鎌倉に戻る時も鎌倉街道上道を通じたのではないかと思い調査することになりました。

2) 東松山市 神戸山妙昌寺 (ごうどさん みょうしょうじ)

最初に調査の為村井住職を訪ね (写真-3) お話をお聞きしました。日蓮聖人が佐渡流罪時のルートとして3つ考えられると教えて戴きました。(図-4)

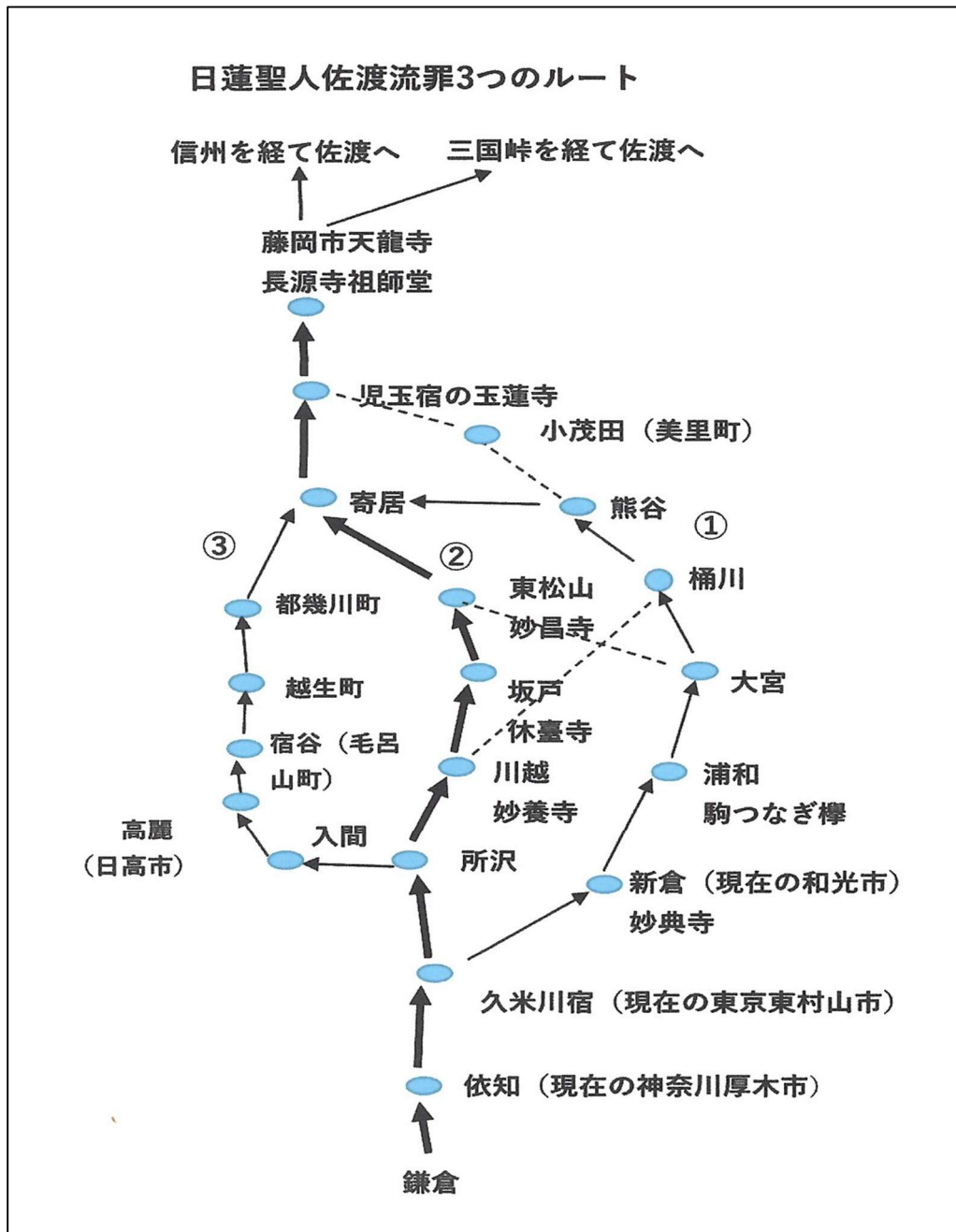


図-4

村井住職から戴いたパンフレットから作成

①は久米川宿→和光市→浦和→大宮→桶川→熊谷→寄居(一番東側)

②は久米川宿→所沢→川越→坂戸→東松山→寄居(中央寄り)

③は久米川宿→所沢→入間→日高市→越生→寄居

(③は鎌倉街道上道に準ずるルートです。) 村井住職によると、お寺はもともと青鳥城近く(現在の唐子小学校付近)に有り、城主斉藤家の寺として弘安4年(1281)創建されました。伝承として城主の屋敷に日蓮聖人が宿泊したと伝わっています。②のルートについて調査することにしました。



写真-3

妙昌寺前で撮影



写真-4

妙昌寺内部で撮影

日蓮聖人の生誕から入滅するまでの60年を絵で説明して戴きました。(写真-4) 祖師堂も開けて戴き(写真-5)、中に安置されている市指定文化財彫刻に指定されている日蓮聖人座像(写真-6)も見ることが出来ました。座像は1木3体仏(いちぼくさんたいぶつ)で残り2体は鎌倉妙本寺と東京都池上の本門寺にある貴重なものであると教えて戴きました。



写真-5

妙昌寺祖師堂前で撮影



写真-6

妙昌寺で戴いたパンフレットから引用

3) 坂戸市正覚山休臺寺（しょうかくさん きゅうたいじ）

室岡住職にお話をお聞きしました。日蓮聖人が流罪の途中で休まれたと伝わる薬師堂があり、その後休臺寺が建てられたと伝わるが伝承として残っているが文書は無いとの事です。



写真-7

休臺寺内部で撮影



写真-8

休臺寺前で撮影

4) 川越市 蓮信山妙養寺（れんしんさん みょうようじ）

相原住職にお話をお聞きしました。（写真-9）川越は「北の叡山」と言われ、寺が多く学問の盛んな地でありました。日蓮が比叡山で共に学んだ仙波尊海憎正に再会、勉学するために川越を訪れた時に投宿した旅宿の夫婦が深く日蓮に帰依し、日蓮から法名を授かり建てた持仏堂が起源であります。その後荒廃した持仏堂を日在が天文7年（1583）に再興し、蓮信山妙養寺としました。このことは妙養寺の釣り鐘に刻まれておりましたが、戦時下の鉄の供出により今は現存しません。日蓮聖人がこの地を訪れたことに間違いはありませんが、それが佐渡流刑になった時か否か、また行きか帰りかも定かではありません。その後、江戸時代には川越四門前の一つ武家寺として栄えましたが文政8年（1825）火災により焼失。のちに武家門として貴重な山門（写真-10）本堂、座禅堂等が再建されました。



写真-9

妙養寺内部で撮影



写真-10

妙養寺山門を撮影

5) 川越市星野山無量寿寺中院（ほしのさんむりょうじゅじなかいん）

門前に日蓮聖人の石碑（写真-11）があり川越に来た事が分かりましたが、寺のパフレットによると若き日の日蓮が尊海の導きにより比叡山にて学を修め、当寺で尊海より恵心流の伝法灌頂（でんぼうかんじょう）を受け日蓮宗を開宗したと記されています。流罪の途中で立ち寄ったのではないと思われます。中院の開基は、天長7年（830）で狭山茶発祥の地でもありました。（写真-12）



写真-11

中院前で石碑を撮影



写真-12

中院で狭山茶発祥の石碑を撮影

6) 本庄市 東光山玉蓮寺（とうこうさん ぎょくれんじ）

阿部住職にお話をお聞きしました。

平安時代後期から鎌倉時代・室町時代にかけて武蔵国を中心に下野・上野・相模の国まで勢力を伸ばしていた「武蔵七党」の一つ児玉党の本拠地が「生の山」にあり児玉の豪族、児玉六右衛門時国（こだまろくえもんときくに）は寺の沿革を記した石碑（写真-13）によると日蓮聖人が佐渡に流刑された折、そして赦免されて鎌倉に帰るときに自邸に泊めました。鎌倉に帰る時には久米川宿（現在の東村山市）まで送り届け、日蓮直筆の曼陀羅を授けられたと伝えられています。この時日蓮聖人から姓を久米（くめ）と改める様勧められ改姓しました。持ち帰ったが、曼荼羅は現在行方不明となっています。児玉改め久米時国は日蓮に深く帰依し玉蓮寺を開基しました。玉蓮寺と久米家が「生の山」から現在地に移ったのは江戸時代になってからです。文献・資料等は隣に建つ久米家の屋敷にあったと考えられ、その後の火災で焼失したため寺には何も残っていないということです。この寺には日蓮聖人が泊まった際、足を洗ったとされる「日蓮聖人御足洗（おみあしあらい）の井戸跡」があります。（写真14）日蓮聖人が立ち寄ったと思われる遺跡があるが全て伝承である事が残念です。



写真-13



写真-14

玉蓮寺で寺の沿革石碑を撮影

玉蓮寺で井戸跡を撮影

7) 藤岡市 福聚山天龍寺 (ふくじゅさん てんりゅうじ)

日蓮聖人の自筆の「方便品16文字」(ほうべんぼんじゅうろくもじ) (写真-15) 残っており、日蓮聖人との深いつながりが感じられたが、寺の住職にお聞きしたところ、日蓮聖人が立ち寄ったのは、ここから2Km位離れた祖師堂であると教えられ祖師堂 (写真-16) に向かいました。



写真-15

天龍寺で撮影



写真-16

長源寺祖師堂を撮影

8) 日蓮聖人の佐渡流罪足跡の結論

埼玉と群馬の日蓮宗のお寺五箇所、天台宗のお寺一箇所を回って調査したが、①～③のルートはどこを通ったか分かりませんでした。各お寺には創建時からの檀家である旧家も残っており、新たな証拠となる文書、記録発見時には真実が分かるかも知れません。日蓮聖人が寺泊でしたための「寺泊御書」(てらどまりごしょ)には、どこを歩いて来たか、ご賢察をお願いするばかりと、宿題を残しましたが解決出来ませんでした。

4. 比企地区に残る源氏ゆかりの地を訪ねて

清和天皇（せいわたんのう）を祖とする河内源氏（かわちげんじ）の略家系図を表し簡単に説明します。

① **源 経基**（みなもとつねもと）平安時代中期の皇族・武将で清和源氏を名乗った初代で武蔵介（むさしのすけ）として赴いた時の館として鴻巣市蓑田城が残っていますが今回は取り上げません。

② **頼信**（よりのぶ）；満仲（みつなか）の三男で河内源氏の祖と言われてます。

③ **頼朝**（よりとも）；義朝（よしとも）の三男ですが初めて武士による政権である鎌倉幕府を開きました。

今回課題研究で取り上げた人物を□で囲ってあります。

範頼（のりより）；頼朝の弟で義経と共に平家滅亡に活躍。

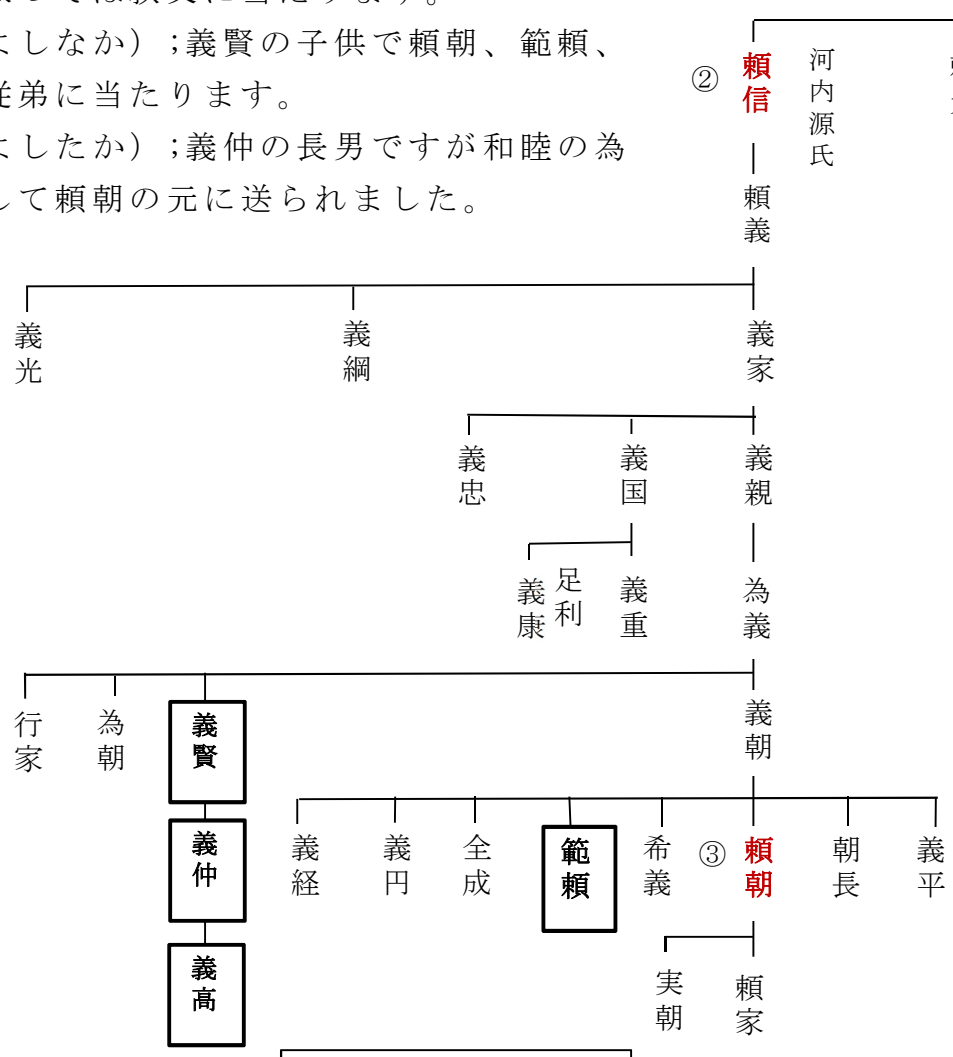
義賢（よしかた）；頼朝の父である義朝の弟で頼朝に取っては叔父に当たります。

義仲（よしなか）；義賢の子供で頼朝、範頼、義経の従弟に当たります。

義高（よしたか）；義仲の長男ですが和睦の為人質として頼朝の元に送られました。

清和天皇
|
貞純親王
|
① **経基**
|
満仲
|
頼光
|
頼国
|
頼綱
|
河内源氏
|
② **頼信**
|
頼義
|
義家
|
義親
|
為義
|
義朝
|
朝長
|
義平

摂津源氏
|
多田源氏



河内源氏略家系図

1) 範頼と蒲桜（かばざくら）伝説

源 範頼は、義経と共に平家打倒で活躍したが、謀反を疑われ建久4年(1193)に修善寺で殺害されました。しかし範頼の死には諸説あり一説には、伊豆で死なず武蔵国に逃れ吉見、北本に隠れ住んだとの伝説もあります。北本市には、石戸の蒲桜と言われる範頼の伝承があり訪ねました。蒲桜は、北本市石戸の東光寺と言う時宗寺院の境内に所在する桜の古木で樹齢800年になります。範頼は伊豆で殺されずこの地に逃れ隠れ住んだと言われてます。その際愛用していた杖が、根付き成長したと伝わります。4月初頭には、白い可憐な桜が見られます。大正11年に、国指定天然記念物の指定を受けています。(写真-17)

昭和40年代には、蒲桜の足元に墓石と思われる板石塔婆が置かれていました。現在は、すぐそばに収蔵庫が作られ保管されています。また市内高尾には、範頼の妻と言われる亀御前の供養塔があり、そこにも桜の巨木が確認されています。春に地元で愛された武将の桜を見学に行くのが、今から楽しみです。(写真-18)



写真-17

阿弥陀堂と蒲桜を撮影

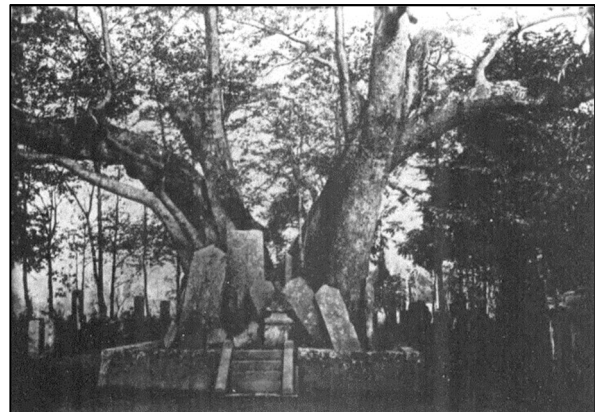


写真-18

塔婆の置かれた蒲桜引用

2) 岩殿山光明院安楽寺(吉見観音)

聖武天皇の御世741年頃、行基上人が観音像を彫り岩屋に納め石で扉をしたのが始まりと言われていています。この地は鎌倉街道には入っていないが、清和天皇を祖とする河内源氏に縁のある地と考え安楽寺を訪ねました。坂上田村麻呂が東征の折(810年頃)、この岩屋を訪ねたが山中で茨や草木が繁茂し入れませんでした。地元住民を集め草木を切り開き、やっと岩屋を見つけました。しかし岩屋の扉は重く微動だにしませんでした。そこで村人、将軍、皆で心を一心に念じたところ扉は軽く開き中より光明があたりを照らしました。まるで天の岩戸が開くようで岩戸(殿)山安楽寺(写真-19, 20)の号を得ました。その後、平治元年(1160年)平治の乱で敗れた源 範頼が、兄の頼朝の乳母の比企の尼の指示で、この寺の稚児僧として養育されました。範頼は静岡県磐田市で義朝と遊女との子として生まれました。蒲の御厨(みくりや)(浜松市)で育ったため蒲の冠者と呼ばれました。頼朝が鎌倉で勢力を得た後も範頼は吉見に住んだと言われてます。そのためこの辺りは、現在でも御所と呼ばれました。範頼の館跡と言われるのは、安楽寺より東に500mほど離れた場所にある息障院との伝説もありました。安楽寺と息障院は、かつてはひとつの大寺院を形成していた様です。息障院が現在の場所に移転したのは、室町時代と伝わっています。寺の周囲には、堀も確認されています。範頼没後は、子供の範円(のりかど)、為頼、義春、義世(よしよ)と五代がこの館跡に居住し、範円以降は吉見氏を名乗りました。安楽寺は、6月18日に「朝観音」と言われる縁日が行われます。早朝より境内で縁起物の厄除け団子の販売があります。これは昔、疫病が流行したときに観音様へ団子を作ってお供えして難を逃れた故事によるものです。因みに団子は串団子です。本堂内には伝左甚五郎作の「野荒らしの虎」の彫刻があります。(写真-21)



写真-19

阿弥陀如来を撮影



写真-20

三重の塔を撮影



写真-21

本堂内 野荒らしの虎
伝左甚五郎作引用

3) 大蔵館跡(大蔵神社) 県指定史跡

嵐山町にある大蔵館跡を訪ねました。ここは鎌倉街道上道で嵐山町の広徳寺から南の大蔵交差点の右手に、源 義賢の館跡と言われる大蔵館跡があります。(写真-22)

仁平3年(1153)に木曾義仲の父で、源 義賢が秩父重隆の娘をめとり、移り住んだとされています。義賢は、源氏の棟梁の源 為義の次男として生まれ兄が義朝です。近衛天皇が皇太子の時に東宮警護の長官である帯刀先生(たてわきせんじょう)を務めました。しかし部下の不始末によって職を追われ、北陸から上野(群馬県)、武蔵(埼玉県)へと移りました。武蔵国で大きな力を持っていた秩父氏と義賢が、結んだことによって関東で義賢の力が増大する事を恐れた義朝は、自分の息子の義平に大蔵館を攻めさせ義賢は、殺されました。この事件は大蔵合戦と呼ばれました。義賢の息子の駒王丸(木曾 義仲)は、木曾へ逃れました。

この館は、東西220m、南北170mの大きさを掘と土塁で覆われています。このような、現在の姿は、戦国時代のもので、義賢の時代のものでないことが発掘調査で確認されています。近年の発掘調査では、堀で囲われた一辺70mほどの小館が見つかり、中からは建物や柵が見つかり現在の姿になる前の状況が分かってきました。大蔵交差点から、東に農家の庭を掘った畑の中に義賢の墓と言われる五輪塔があります。(写真-23、24) しかし一説には、義賢の妻の墓とも言われています。



写真-22

大蔵館跡を撮影



写真-23

義賢公の御廟跡を撮影



写真-24

義賢の墓を撮影

4) 鎌形八幡神社

大蔵館跡前の県道を西に向い嵐山町鎌形のほぼ中央、都幾川の左岸に鎌形八幡神社があります。ここは、源 義賢、木曾 義仲、義仲の息子の義高ゆかりの神社です。「鎌倉街道を探るならば八幡神社をたぐって行け」（写真-25）という言い伝えが昔からあるそうです。鎌倉街道は、源氏ゆかりの八幡神社を各所において鎌倉へ向かっている街道なのです。御家人達のいざ鎌倉と言う時にも、この各所の八幡神社の存在が、武士達の心を熱くしたのかもしれませんが。境内には、義仲産湯の井戸があり、今でも澄んだ清水が湧き出ています。（写真-26）この神社は、歴史上最初の征夷大將軍となった坂上田村麻呂が、延暦12年(793)、宇佐八幡宮(大分県)を勧請して建立した神社と言われてます。比企郡には、坂上田村麻呂の伝説がたくさん伝えられています。この神社には二面の懸仏を奉安しています。一面の阿弥陀如来像のものは、源 義高が奉納したと伝えられています。春には流鏝馬が奉納されます。



写真-25

鎌形八幡神社風景を撮影



写真-26

義仲の産湯に使った清水を撮影

5. 鎌倉街道と鎌倉幕府の始まりと終焉

1) 奥州征伐（鎌倉街道を経て奥州へ）

1185年壇ノ浦の戦いで平氏を滅ぼした後、東北においては奥州の藤原秀衝が鎮守府将軍となり、名実ともに奥州を支配する存在になりました。1188年に頼朝と対立して逃亡していた源義経が奥州平泉に潜伏している事が判明し、鎌倉幕府を安定させる為に潜在的脅威である奥州藤原氏を打倒する必要性が生じ、各御家人に命令を發しました。以下参考資料「吾妻鏡」1189年7月17日付け、現代語訳『奥州征伐における作戦会議の内容』

「軍勢を三手に分ける事とする、東海道の大將軍 千葉常胤はそれぞれ岩崎を廻って阿武隈川の湊を渡り、そこで源頼朝軍と合流せよ（鎌倉街道 下道）」「北陸道の大將軍比企能員は鎌倉街道上道を経て上野国の高山・小林・大胡・佐貫の住人を動員し越後国から出羽国の念種関に出て合戦せよ。」

「頼朝は大手軍の大將軍として中路より下向する。先鋒は畠山重忠とする。」

「武蔵・上野の党のものは葛西三郎に従い合戦をとげるようにと指示。」以上の命令が会議で決定され、7月19日頼朝軍は鎌倉を出發しました。

2) 鎌倉街道沿いの有力武将たち

桓武天皇の孫の高見王が臣籍降下し平高望を名乗り安房・常陸に移住する、その息子五男の良文が武蔵（熊谷市村岡）に館を構え勢力を拡大しました。良文の息子忠頼の子孫が安房に移り千葉氏を名乗る。また秩父氏も良文の孫の平将恒が秩父に館を構え秩父氏を名乗る、以後秩父氏の子孫が武蔵国の武家の重要な位置をしめる事になります。

（秩父氏の系譜武将）

河越氏・畠山氏・江戸氏・豊島氏・葛飾氏・渋谷氏・葛西氏・小山田氏・河崎氏・秩父氏は平氏の家系ですが、棟梁の秩父重隆が大蔵合戦で死亡した為に、その後は畠山氏や河越氏、江戸氏が中心になってゆきます。1180年頃になり秩父氏の多くの系譜武将は源頼朝の配下に入り、数多くの合戦に参加する事となります。この奥州合戦にも多くの秩父氏系譜の武士が参加しました。

また、平高望の長男は平国香で安房国で勢力を拡大し、その孫が伊勢へ移り伊勢平氏を名乗ります、その系譜の中から平清盛が輩出されました。

3) 新田 義貞鎌倉街道を南進 分倍河原(ぶばいかわら)の戦いと倒幕

新田 義貞 (源 義貞、河内源氏 新田氏本宗家 棟梁) (写真-27) 利根川で越後の新田党や甲斐源氏・信濃源氏と合流し鎌倉街道を南下して行きます。久米川の近くで足利 千寿王と合流し武蔵・常総・常陸・下野の幕府に不満を持つ武将も集まり、総勢 20 万人となり、小手指河原の戦いに勝利し、次いで久米川の戦いで勝利します。

鎌倉幕府は急ぎで 10 万の兵を分倍河原 (写真-28) に援軍として送り体勢を固めます。新田軍は総攻撃をかけますが増員された敵兵のため敗北し、鎌倉街道を北上し堀込 (狭山市) まで敗走します。しかし、相模の武将の三浦氏、横山党、江戸、河越、豊島の坂東八平氏と武蔵七党が新田軍に加勢する事となり新田軍は体制を立て直し、再度分倍河原へ攻め込み勝利する事になります。この勝利で勢いを増し、多摩川を渡り相模を抜け鎌倉にて鎌倉幕府を倒す事になりました。

以後、足利 尊氏と新田 義貞は位の高い尊氏の勢いが強くなり、他の武将も尊氏に付く者が多く、次第に敵対するようになり、以後、多くの戦いを続ける事になります。

4) 笛吹峠の戦い

1352 年 2 月新田 義貞の三男新田 義宗が小手指河原で足利 尊氏の軍勢と戦うが、最終的に戦いの決着がついたのが笛吹峠でありました。敗れた義宗は越後に逃走し、宗良親王は信濃へ逃走しました、足利 尊氏が関東を制圧する事になります。この戦いの際に、月明かりの中で宗良親王が笛を吹いたことから笛吹峠と命名されたとの伝承が残りました。時代が変わりこの地を整備する際に多くの人骨が発見されたとの記録が残っているそうです。



写真-27

分倍河原駅前

新田 義貞騎馬像を撮影



写真-28

分倍河原

古戦場跡公園を撮影

6. 佐渡流刑地の解説と流刑者の説明

佐渡の流刑地としての歴史は古く、奈良時代から始まりました。本土より離れた立地から朝廷の敵とみなされた人の流刑地として、指定されたようです。犯罪者が行く流刑地ではなく、政争に敗れた貴族や知識人が佐渡に流される事が多かったようです。所払いの意味に近いと考えます。

① 日蓮聖人

地震や飢饉、疫病などの災害が相次いだことから、鎌倉幕府の最高責任者でもある北条 時頼に「立正安国論」を提出しましたが理解してもらえず、伊豆に流罪になります。3年後、時頼死後、幕府要人に再度「立正安国論」を提出する、その中で相次ぐ災害の原因は幕府や民衆が邪教を信仰している事にあるとし、国土を守る神々が国を去り、邪鬼が国に入り込み災難を起こしている、災難を止めるには法華経に帰依する事が必要であると説明し、鎌倉幕府や他宗派を激しく批判した事により、1271年に幕府から佐渡への流刑が決定しました。1274年に赦免され鎌倉に戻りました。

② 穂積朝臣老（ほずみあさみおう）

奈良時代の万葉歌人。皇室を批判した事で、佐渡へ流罪となりました。722年から740年までの18年間を過ごしました。

③ 順徳天皇（じゅんとくてんのう）

第八代天皇になった順徳天皇は父親の後鳥羽上皇による鎌倉幕府の倒幕計画に参加し、承久の乱をおこしたが、幕府の北条 義時に鎮圧され失敗に終わりました。承久の乱での首謀者として1221年に佐渡へ流刑になりました。22年間本土に戻る事ができず、46歳で崩御しました。後鳥羽上皇は隠岐に流罪となりました。

④ 世阿弥（ぜあみ）

室町幕府三代将軍の足利 義満の寵愛をうけ能楽を大成させますが、六代将軍の足利義教の怒りにふれ1434年佐渡へ流罪になりました。流刑中に舞台演劇である「能」を完成させようとしています。1436年以降の消息は不明ですが、流刑が解かれ本土に戻ったと伝えられています。

鎌倉時代、佐渡への流刑は生活基盤もある程度保障され、比較的穏やかなものであったようです、また地方には知識人が少ないので、都の情報などを知りたかった事もあるようです。しかし江戸時代になると金鉾が発見され、多くの労働者が必要になったため、犯罪を犯した人を佐渡へ送るようになり、厳しい状況での流罪になったようです。

7. 活動記録

日付	内容	場所
2月21日	研究テーマの設定と役割分担	市民大学講堂
2月28日	サブテーマの検討とタイムスケジュールの確認	市民大学講堂
3月6日	参考書籍・資料の紹介	市民大学和室
3月10日	「歴史民俗資料館」訪問と伊波比神社「子どもやぶさめ」見学	毛呂山町「歴史民俗資料館」伊波比神社
4月3日	ボランティアガイドと共に鎌倉街道掘割遺構と川角古墳群を探索	毛呂山町「歴史民俗資料館」とその周辺の鎌倉街道上道
5月22日	サブテーマ（具体的内容）について話し合う	市民大学研修室2
5月29日	グループ分けと具体的内容の検討及び研究視点（目的）の確認	市民大学研修室2
6月13日	日蓮聖人の生い立ちと佐渡流罪のルートについて	東松山市神戸山妙昌寺
6月19日	源範頼と蒲桜を訪ねる（源氏班）	北本市東光寺
6月19日	佐渡流罪のルートを1つに絞る（日蓮班）	市民大学研修室2
6月25日	源義賢の館跡及び周辺史跡を調べる（源氏班） 源範頼の屋敷跡と寺の歴史	嵐山町大蔵館跡 鎌形八幡神社 吉見町岩殿山安楽寺
7月3日	佐渡流罪のルートと寺の関わり（日蓮班）	坂戸市正覚山休臺寺 川越市蓮信山妙養寺
7月17日	佐渡流罪のルートと寺の関わり・様々な伝承話（日蓮班）	本庄市東光山玉蓮寺 藤岡市福聚山天龍寺
7月31日	班ごとに進捗状況の報告とここまでの完成資料の配布	市民大学研修室2
8月6日	日蓮の川越遊学の地を訪ねる（日蓮班）	川越市中院ほか周辺寺院
8月8日	現時点での資料の構成と推敲（日蓮班）	市民大学研修室2
9月4日	進捗状況の報告と資料のまとめ	市民大学研修室2
9月7日	テーマの検証と分倍河原訪問日の検討（名所・旧跡班）	東松山市立図書館
9月12日	分倍河原駅前の新田義貞の騎馬像撮影と分倍河原古戦場の見学と撮影（名所・旧跡班）	分倍河原駅前 分倍河原古戦場

8. あとがき

課題研究のテーマについて、ただ「鎌倉街道」という言葉の響きに惹かれて参加を決めてしまい、まさしく「知識ゼロ」からスタートでした。三グループに別れました。始めに毛呂山町歴史民族資料館を全員で訪れ、近くを通る鎌倉街道を歩いて見て当時の掘割遺構が残っていることに驚きました。日蓮聖人佐渡流罪の足跡を訪ね、各お寺を訪問する機会に恵まれました。比企地区にも源氏の館跡もあり「鎌倉時代」が息づいていることを感じられました。調査を通して、班員同志の交流も深まり、一つの目的を持って仲間と行動する楽しさも覚えしました。今回の調査でご協力して頂いた方々に紙面をお借りして熱く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

調査は終了しましたが、これで終わりとせずこれからも深い関心を寄せて行こうと思っています。

9. 参考文献

- テレビ埼玉著2001年3月『鎌倉街道夢紀行上道コース』さきたま出版会
高橋 光幸著2022年7月『鎌倉街道を歩く』さきたま出版会
内田 晃著 2020年11月『40代からの街道歩き鎌倉街道編』(株)創英社
渡辺 宝陽著 2011年6月『知識ゼロからの日蓮入門』(株)幻冬舎
村井住職著2024年6月『日蓮聖人佐渡流罪3つのルート』『妙昌寺の系譜』
相原住職著 2024年7月『妙養寺縁起』
日蓮宗新聞社著 2020年11月『佐渡配流750年』
佐々木 肇著2004年『日本の名僧12巻 法華の行者日蓮』吉川広文館
(社)佐渡交流機構著『佐渡市観光情報資料』
五味 文彦、本郷 和人著2008年『吾妻鏡4巻 奥州合戦』吉川広文館
関 幸彦著 2014年『武蔵武士団』吉川広文館
埼玉県立嵐山史跡の博物館著 2020年『秩父氏の歴史』
湯浅 治久著 2012年『動乱の東国史3巻蒙古合戦と鎌倉幕府の滅亡』
吉川広文館
峰岸 純夫著 2005年『新田義貞』吉川広文館
『野荒らしの虎』の写真掲載については安楽寺住職の了解済